

歴史の深層と時空

関 和 彦

江戸時代、十八世紀初頭の宝永年間の頃、島根半島の北海岸、そこを東西に走る繋ぎの道に、巡礼者の杖つく音がしばしば聞こえるようになったという。誰が最初に始めたのであろう。島根半島の何処に巡礼者のこころを癒すところがあったのであろうか。その巡礼の道は人々の心を繋ぐ、四十二の浦々と社、海辺の潮汲、そして詠歌に籠められた「繋ぎ」の道であった。

古来、島根半島の北岸の浦々は基本的に半島の背に当たる北山を越えて、半島南部の地域と交流して生活を営んできた。奈良時代の『出雲国風土記』の島根・秋鹿・楯縫郡条を通覧すると、例えば楯縫郡佐香郷などでは明らかに、佐香浜・佐香川・佐香河内・佐加社という半島北海岸から宍道湖へという南北空間が浮かび上がってくる。その南北空間が地域社会であったのである。

しかし、同じ『出雲国風土記』がつつたえる神々の世界はさらなる古代世界の「深層」を語っているようである。

『出雲国風土記』をひもとくと、「磐坂日子命（いわさかひこのみこと）、国巡り行でましし（秋鹿郡恵曇郷）」、「衝梓等平与留比古命（つきほことおよるひこのみこと）、国巡り行でましし（秋鹿郡多太郷）」、「天甕津日女命（あめのみかつひめのみこと）、国巡り行でましし（秋鹿郡伊農郷）」、「天の下造らしし大神の命・・・巡り給ひ（楯縫郡玖潭郷（くたみ））のように島根半島を縦横に「巡る」、神々の巡行の世界を目にするのである。その神々の巡行は鎮座の良き地を求めての旅であった。四十二浦巡りは神々の鎮座する浦々を巡る旅であり、神々の「巡る」旅

関 和 彦 著
古代出雲の深層と時空

古代出雲の深層には、何が隠されているのか。その時間・空間には、何が広がっていたのか。古代出雲の主要史料たる『出雲国風土記』を中心に、膨大な史・資料を渉猟し、古代出雲の実態を追究、埋もれていた近世国学者らの貴重な研究をも踏まえて、往時の世界を描き出す。

ISBN978-4-88621-669-4
同成社

の影響のもと島根半島の東西を繋ぐ巡礼として紡ぎ合わされ、育てられてきたのであろう。

その始まりが何時まで遡るのかは未知の歴史であるが、確実に四十二浦巡りには積み重ねられた深い歴史、空間があったのである。

この夏、同成社という出版社から拙著『古代出雲の深層と時空』という書が出版された。四十二浦巡りにみる積み重ねの歴史の諸相、それは出雲国全体にも広がる世界でもあった。偶然であらうか、「四十二浦の神々が依りついてくれたのであろうか、拙子の古代史研究「四十二」年目の成果の一つとなった。

基本的な研究書である拙著『出雲国風土記註論』（青木書店、二〇〇六年）から丁度十年である。今後、二書を踏み台にさらに高きものを求めたいが、まずは「人々の心を繋ぐ」島根半島四十二浦巡りの「深層と時空」であらう。

（研究座長）

【研究会員募集】

年会費三千円で、会員には研究会で発行する広報誌、ガイドブックを送付し、浦巡りバスツアー等主催行事の御案内を致します。

詳しくは事務局へお問い合わせください。

事務局 TEL 090-14572-0641（木幡）
FAX 0852-1211-9942

編集後記

研究会設立五周年を迎えたこの春、会長が交代致しました。この間冊子「七浦巡りの旅」六巻七千冊余りを刊行し、現在「島根半島四十二浦巡りの旅（祭礼・伝説）」（仮題）の製作を進めています。また、八月には関和彦座長が古代出雲研究四十二年を振り返り「古代出雲の深層と時空」を出版されました。研究会活動も大きな節目を迎えていると感じます。

古くは出雲大社の別当寺であったという鰐淵寺の伝説を聞くため、鰐淵コミセンを訪ねましたが、境内の摩多羅神社がその痕跡と聞きました。

最近では近くの奥宇賀の「黄泉の穴」を尋ねる方が多くなったと聞き、急峻の山上に鎮座する小祠を会員三名で訪ねました。その「黄泉の穴」は風土記には、大國主命が「綾戸日女命」を伺い求婚されたところとされています。

「黄泉の穴」について西田コミセンで聞くと地元では、「冥土さん」と呼び、その深い穴は出雲大社まで繋がっていると伝わっています。また、江戸時代の国学者本居宣長の随筆「玉勝間」にも、「出雲国なる黄泉の穴」として探検記風に詳しく記録されています。

縁結びの「出雲大社」に、「求婚」、「冥土」とそれぞれ深い関係を持つ言葉が並びましたが、綾戸日女命は拒絶の神でもあるとされ、まさに歴史の深層と時空の奥深さに気付くと共に神々の存在を身近に感じます。

（秋星子）

島根半島四十二浦巡り第9号

発行 平成二十六年十月十日

発行者 島根半島四十二浦巡り再発見研究会

千六九二〇〇七四 出雲市小境町八〇三 一畑寺内

ホームページ『島根半島四十二浦巡り』 <http://42ura.jp/>